研究室スタッフ紹介

※東京大学公式ホームページより転載（2016年6月12日時点）

教授　恒吉 僚子（つねよし りょうこ）[比較教育学]

子どものしつけや教育、社会化過程を、それを取り巻く社会・文化的コンテクストの中でとらえ、国際比較、異文化間比較を行なっています。「多文化化」「グローバリゼーション」等、マクロな社会や、国境を越えた動きと、教室内のミクロな日常性とをつなぐ作業を、比較視点から模索することに関心があります。国際比較から見た日本の子どものしつけや教育の特徴等にも関心があります。

教授　本田 由紀（ほんだ ゆき）[教育社会学]

主に、家族と教育、教育と仕事、仕事と家族という、異なる社会領域間の関係について調査研究をしています。90年代以降の日本社会では、この３つの関係には矛盾が露わになっています。たとえば家庭教育に対する圧力や格差の高まり、「学校から職業への移行」の機能不全、仕事の不安定化による家族形成の困難化などです。それらをどう立て直していくか、行政や草の根的な運動がいかに関わってゆくべきかを考えています。

教授　橋本 鉱市（はしもと こういち）[高等教育論]

高等教育に関わる諸事象を、主に歴史社会学的なアプローチによって研究しています。学問領域・内容の制度化プロセス、プロフェッションとしての大学教授職、学位制度・教育プログラム、高等教育の制度・組織的分化、専門職養成の政策過程など分析対象は多岐にわたりますが、激変する現代の高等教育をめぐる制度・組織・政策を、近代以降の大きな歴史的な流れの中で相対化する地道な作業が必要だと考えています。

教授　中村 高康（なかむら たかやす）[比較教育システム論]

大学入試や高校生の進路選択など、「教育と選抜」に関わる諸現象の計量的・比較社会学的検討が主要な研究テーマです。近年では関心を拡げて、社会階層と教育制度の関連、進路選択と地域性の問題、メリトクラシー（能力主義）に関する理論的考察なども手がけています。量的な研究方法を使うことが多いですが、最近は質的な方法もできるだけ取り入れた総合的なアプローチ（混合研究法）がとても重要だと感じています。

准教授　仁平 典宏（にへい のりひろ）[教育社会学]

「教育的なもの」をその外部において捉えることを課題としています。例えば、社会保障制度は既存の給付型から教育・訓練型へと変化しています。「市民」概念も、教育を通じて「なる」ものへと転換しつつあります。「主体の絶えざるバージョンアップ」を要請する〈教育〉のコードが、隣接するシステムに忍び込み変質させていく―その有り様と帰結を社会学的に追尾することで、近年の社会変化の諸相を解明していきたいと思います。

卒業論文・修士論文一覧

●2015年度　学部卒業生の卒業論文

□**武野文弥**／学校教員の専門職性に関する知識的・組織論的研究―民間人校長の分析を通じて―

□**平島朝子**／15年戦争下における帝大基督教青年の内面史―東大YMCA早稲日記の分析―

□**前田活歩**／教員の認識と授業実践の考察―首都圏公立進学校2校を事例として―

□**磯崎智大**／国内インターナショナルスクールに通う生徒の抱くナショナルプライド意識についての分析―生徒へのインタビューからの分析―

□**有賀瑞希**／「帰国子女」の社会的位置づけと「就活」の戦略との関連―海外高校を卒業した大学生へのインタビューを通じた分析―

□**王尾直暉**／公立中学校における校務の情報化の実態と教員の意味づけ―X市，Y市の教員へのアンケートとインタビューを通して―

□**久保京子**／理系大学院生の将来戦略―研究室選びと研究室への適応に注目して―

□**堺一平**／専門学校の職業教育と学生の進路選択について

□**佐藤啓太**／地方公立進学校出身者の進路選択プロセスに関する研究―進学先大学と就職先の地域選択に焦点を当てて―

□**重倉陽子**／日本人の国際教育協力に関する研究―教育NGOを事例として―

□**田島志保**／地域日本語教室における指導者と学習者の関係性について―指導者の学習者に対する認識に着目して―

□**新倉亜裕子**／1970年代以降の日本におけるシティズンシップ教育言説の変容過程―「公民教育」と「市民教育」との関係性に着目して―

□**東山和叡**／中国人ニューカマーの子ども観についての研究―大学生へのインタビューを事例として―

□**堀井鴻乃英**／幼児教育の追求する子ども像に関する考察―日本とフランスの幼稚園を比較して―

□**眞岩哲史**／東大生の挫折体験に関する物語論的分析

□**増田陽子**／都立進路多様校とNPOの連携による学習支援に関する事例研究

□**松本陸**／公立高校の学区撤廃をめぐる政策過程の実証的分析―各都府県のアジェンダ・セッティングから政策決定過程に着目して―

□**安福友里恵**／私立中高一貫校出身者のエリート意識―地方公立高校出身者と比較して―

□**山崎輝史**／Iターンのキャリア戦略に関する研究―職業威信の高い仕事からの転職理由を中心に―

●2015年度　大学院修士課程修了生の修士論文

□**田中麻衣子**／〈居場所〉概念と実践の可能性―事例研究を通して―

□**岡本実希**／子どもの貧困対策における教育と福祉の連携の実態に関する実証的研究―困窮家庭の児童に対する自治体の学習支援事業に着目して―

□**胡中孟徳**／中学生の生活時間の計量社会学―「受験体制の社会学」再考―

□**坂田真啓**／わが国における作文指導の「表現内容」から「表現方法」への変容過程―1980年から2002年までの国語教育雑誌の分析を通して―

□**福島創太**／若年層の自律的キャリアに関する実証的研究―大卒20代を対象にした転職者インタビューとキャリア面談を題材に―

□**前田麦穂**／教員採用における「選考」に関する研究―教育公務員特例法の成立過程を中心に―

近況だより

卒業生の代表の方に、近況をつづっていただきました。

不惑の転職、東京からセブ島へ

田中圭一（2000年度学卒）

今年６月、大学卒業以来勤めたＮＨＫを退職し、英語教育ベンチャー企業「QQ イングリッシュ」に転職しました。フィリピン人講師によるマンツーマンのオンライン英語レッスンや、フィリピン・セブ島で留学生向け英語学校を運営する企業で、私は東京からセブ島に移住し、経営全般や国際展開など幅広い業務を担当しています。

NHK での 16 年間の大半は、国際ニュースを取材する記者として過ごしました。2010 年～13 年はマニラ支局特派員としてフィリピンに赴任し、南シナ海領有権問題などを追いかけました。そんな記者人生を送っていた私がなぜ全くの異分野に転職することになったのか。

それは、長年取材を続ける中で、「多くの人のために『何かを伝える側』から『何かを生み出す側』に行きたい」という気持ちが強くなったためでした。何の因果か、去年12 月に離婚して独り身に戻った頃、転職先の事業に出会って強く魅了され、決断しました。

「人生は一度きり。死ぬ時に後悔しない生き方を」と言えばカッコつけすぎですが、不惑（40 歳）になって迎えた転機を思い切り楽しみ、もがいていきたいと思います。

スウェーデン留学記

久保寺さつき（2014年度学卒・修士2年）

１月からスウェーデンのストックホルム大学に交換留学に来ています。６月現在スウェーデンは深夜でも空がぼんやりと明るく、北極圏に近い場所に住んでいることを改めて感じます。

こちらでは大学院の授業のほかに、日本語を学ぶスウェーデン人学生の会話の練習相手になるボランティアをしています。日本に興味を持つ学生が非常に多いことを嬉しく感じると同時に、外から日本について考え直すことで日々新たな発見があり、刺激的な毎日を送っています。

スウェーデンが日本と大きく異なると感じたのは、（教社的な言葉を用いれば）教育と労働の「間断なき移行」をしない人がとても多いということです。高校卒業から大学入学までにアルバイトやインターンシップで経験を積むことも多く、大学でも専攻を変えることが比較的容易で、働き始めてから仕事を辞めて大学に戻る人も珍しくないそうです。多様なライフコースが可能になる背景には、充実した福祉制度や新卒一括採用でないことなど様々な要因があるのでしょうが、「間断なき移行」が当たり前の日本で育った私にとって、スウェーデンの人々の自由な生き方はとても素敵に映ります。

こちらは長い夏休みに入りました。英語とスウェーデン語を勉強しつつ、ヨーロッパの夏を満喫したいと思います。

目の前のことを考える日々

佐藤啓太（2015年度学卒）

現在、私は金融機関に勤めています。大学で学んだ教育社会学とは異なる新しい分野の仕事に取り組む楽しさもあり、充実した日々だと感じる一方で、気づけば社会人生活も２か月が過ぎていることに若干の焦りもあります。

この２か月を振り返ると、仕事や目の前の生活について考える時間が増えたことに気づきます。「明日は営業でお客様に会うから服装を意識しよう」、「週末が〆切の仕事が多いから早めに出社して時間をつくろう」、「大きな出費があるから節約しよう」といったことばかり考えています。所属する会社が決まり、生活環境が時間的にも経済的にもある程度定まったからでしょう。

一方で、学生時代を思い出すと、比教社で社会学を専攻していたこともあり、社会や、社会と自身の関係についてもしばしば考えていました。夜遅くまで学科控え室に残り、先輩、後輩、同期あるいは先生と、社会について時間を忘れて話したことが懐かしく思い出されます。

比教社の先輩や同期が様々な業界の企業へと就職したことから、私が経験できない多様な業界についての話も聞けるようになるでしょう。また、私の仕事と社会の関係についても話せるようになります。一杯飲みながら、様々な場所で活躍するみなさんの近況を伺い、違う目線から社会について語る日が楽しみです。その日を楽しみに、新社会人らしく元気に仕事に取り組もうと思います。

卒業生の進路

山口泰史（2012 年度修了、博士１年生）
平島朝子（2015 年度学卒、修士１年生）

2015年度は、学部19人と修士6人、計25人が比較教育社会学コースを卒業・修了しました。うち、17名が就職となっております。

就職先の業界は、IT、放送、銀行、広告、シンクタンク、公務員等です。業界は様々ではありますが、比教社で得た専門性は柔軟に活かされるものと思います。大学院進学者は8名（うち修士課程4名）と昨年に引き続き多くなっており、近年他大学出身者や社会人経験者も増えてきている本コースの大学院はますます活気を増しております。

就職された皆様が、様々な業界で諸先輩方のようにご活躍されますことを祈念しますとともに、私達自身含めて院生たちも本コースおよび学問の発展に貢献できるよう、引き続き精進いたします。